

霧島の田の神々

南九州には全国的にも珍しい文化が多く残っています。今回は、その代表例である「田の神さあ(田の神)」を紹介します。

田の神さあとは

「田の神さあ」は南九州の方言で「田の神様」という意味です。日本では古くから農耕神を祭っていて、『古事記』や『日本書紀』にも「ウカノミタマ」や「トヨウケビメノカミ」など農耕神の名が出てきます。その中で、田の神は稲の豊作をもたらす神として信仰されてきました。全国的に信仰されてきた田の神ですが、石を削った像である「田の神さあ」に豊作を祈る風習は、十八世

紀初期に始まった南九州(旧薩摩藩)だけの文化です。当時は霧島山の噴火や天災などで米が不作の厳しい時代でした。像は稲の豊作を祈る農民の心のよりどころとして造られたといわれています。

市内の田の神さあ

このように古くから信仰されてきた田の神さあ。市内にもさまざまな形をした像が残っています。

代表的なものは、鹿児島神宮の御神田にある県指定有形民俗文化財の「宮内の田の神」です。高さが83センチ、顔は田の神舞の翁面に似ています。頭には大きなシキをかぶり、右手にしゃもじ、左手に杖を持っています。一般的な田の神像と違い、今にも舞を始めそうです。背面に「奉寄進 天明元辛丑天九月吉日 正八幡宮 田神 沢五納右衛門」の銘が刻まれています。天明元年は西暦一七八一年で、今から約二四〇年前に造られたことが分かります。正八幡宮は、中世から近世にかけて使われていた鹿児島神宮の名称です。沢五納

右衛門という人物は、正八幡宮の神職を務めていました。沢氏は百十家ほどある社家のうち、筆頭格であった四社家の一つであることから貴重なものなのです。

市内で最も古い像は、隼人町松永の下小鹿野にあり、像の横の石碑には「享保十六年辛亥二月」と刻まれています。享保十六(一七三一)年



玉利の田の神



下小鹿野の田の神



宮内の田の神

のものです。右手にしゃもじを持ち、欠けている左手には杖を持っていたような跡があります。

溝辺町麓の玉利地区にある像は独特な姿をしています。ほかでは見られない頭髪表現や、ゆったりとした着衣でふっくらとした体型はとて写真です。高さが約80センチある座像で、像の中でも大きい部類に入ると思われます。背面には「元文四年末 庚申 奉寄進 三月吉日」と刻まれており、西暦一七三九年三月に庚申講衆によって造られたことが分かります。

近年の稲作との関わり

県内各地では春と秋の2回、田の神を祭る行事である田の神講をしていましたが、年々実施する地域は少なくなっています。稲作は天候や害虫などの影響を受けやすいため、田の神に豊作を祈願していましたが、灌漑や農薬が発達した現代は、神様にすがらなくてもよくなったということでしょうか。

(文責 坂元)

郷土の扉

The gateway to local history

郷土の扉

※1 神社の御田植祭で奉納される田の神舞をかぶる面。

※2 縄で編んだ敷物。

※3 庚申(かのえさる)の日に村単位などで徹夜をして神仏を祭る集まり(講)の参加者。